慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦国軍記の生成と展開に関する一考察：『足利季世記』と『別本細川両家記』
Sub Title	A study of formation and development on war chronicles of Sengoku era : Ashikaga kiseiki and Beppon Hosokawa ryokeki
Author	小秋元, 三八人(Koakimoto, Miyahito)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.120, (2021. 6) ,p.1 (240)- 26 (215)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01200001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦国軍記の生成と展開に関する一考察

――『足利季世記』と『別本細川両家記』――

小秋元　三八人

一　はじめに

応仁の乱終結後の明応二年（一四九三）、管領細川政元が将軍足利義材を廃し、清晃を擁立するクーデター（明応の政変）を起こして以降の畿内の政治情勢は、足利将軍家・細川家・畠山家の分裂と、双方を支える内衆・被官の動向も相まって、混迷の度を深めてゆく。明応の政変を「戦国時代」の始まりとする研究者も多い。

明応年間以降の細川家の内乱は、一つには、実子のなかった政元が澄之・澄元・高国と養子三人を迎え、相互に争わせたことに起因する。永正四年（一五〇七）、澄之派内衆により政元は暗殺される。直後、三好氏を擁する澄元が澄之を自害せしめるも、澄元は地位の安定を保てず、義稙を奉ずる高国に畿内を放逐され、以降、両者は長期にわたり覇権を巡り争うこととなる。幕府の中枢ともいえる細川京兆家の内部分裂は、内衆ばかりか六角氏・朝倉氏ら近国の守護大名をも巻き込んで、転変極まりなく、抗争は澄元の没後も晴元（澄元嫡男）に継承されて続いた。

この四半世紀に亘る争乱からは数多くの軍記物語が成立し、実に一〇種ほどの作品が『戦国軍記事典　群雄割拠篇』に立

項されている。その中でも、本稿では『足利季世記』およびそれと関わりの深い軍記物語を数編、取り上げる。

『足利季世記』とは、応仁の乱後から、織田信長が足利義昭を擁し入京する一五七〇年頃までを描く、長大な通史的軍記物語である。成立年代・作者はともに不明[1]。書名の「季世」は末代の意で、後人の命名であろう。現在の歴史学ではあまり顧みられないものの、近世には重要史料と目されていたようで、『本朝通鑑』や、江戸期に成立した室町時代後期通史『重編応仁記』（宝永八年［一七一一］刊）の一典拠となるなど、写本のみの流通ながら影響力を有した。明治期に入ると『足利季世記』は『史籍集覧』に収載され、これは幸田露伴が『魔法修行者』（一九二八）・『雪たたき』（一九三九）において依拠した資料となった。数々の興味深いエピソードにも富み、この時代のイメージをも形作った『足利季世記』は、戦国軍記を代表する作品の一つといえる。

さて、『足利季世記』において注目されるのは、その異本ないし別本の関係にある作品（扱う内容および構成をほぼ同じくするもの）が、数多く存在することである。ところが、これらの作品相互の関係は錯綜を極めるようで、先後関係も十分には明らかではない。膨大な異本群は『国書総目録』記述の混乱をも招いている。『足利季世記』等の研究としては唯一、佐藤陸氏の業績[2]があるが、それも既に三〇年以上が経過しており、また新たな伝本も見出されたので、再考の要がある。

そこで、本稿ではまず、『足利季世記』とその類書を系統分類し、伝本を一覧する。続いて、系統間の関係を改めて定めたい。このとき、原初的な姿を留めるであろう一本を探し得たので、あわせてこれを紹介することで、整理の一助とした。

なお、本稿にて言及する足利将軍や武将はたびたび改名しているが、煩を避けるため、以下、年代に関わらず最も知られる名で表記を統一した。

二　『足利季世記』と《三部軍記》群——系統と伝本

『足利季世記』は八巻から成り、各巻に別題が付されている。その類書群を含めて、巻の区切りと巻題、巻数に着目し、AからDまで四系統に分類した[3]。なお、注でそれぞれの系統に属する伝本を示した。

A

『足利季世記』系統[4]

八巻（巻一「畠山記」、二「舟岡記」、三「高国記」、四「三好記」、五「勝軍地蔵軍記」、六「久米田軍記」、七「義秋公方記」、八「野田福島合戦記」の巻題を有す）。巻一・二は合綴、ないし目録を並べて記載されるなど一括して扱われるものが目立つ。代表的な系統である。改定史籍収覧一三所収。

B

『歴代記』系統[5]

八巻（巻一・二は巻題なし。巻三「三好記」、四「日吉元服記」、五「穴太記」、六「勝軍地蔵山軍記」、七「久米田軍記」、八「義秋公方記」）。巻一はAの巻一「畠山記」二「舟岡記」に、巻二はAの巻三「高国記」に相当するが、Aとはやや本文が異なる章段がある。巻三「三好記」・巻四「日吉元服記」・五「穴太記」はAの巻四「三好記」を分割し、Aの巻八「野田福島合戦記」は欠く。また、Aと比べ章段に増減がある。

C

『三部軍記』系統[6]

三巻（巻一「畠山記」、二「舟岡記」、三「高国記」）。Aの巻一から三とは巻題・巻の区切りを同じくし、本文も極めて類似する。また、巻一と二を一括して扱う傾向もみられる。一部の伝本[7]で外題を『三部軍記』としており、これは当系統の形態を的確に表現するものと考え、系統名をこのように命名した。ただし、この形態に統一題は与えられなかったようで、ほかにも『畠山舟岡記』『三闘記』等、外題は一定せず、また単に巻題を併記するに留める伝本もある。

D

『別本細川両家記』系統[8]**（以下、『別本両家記』と略）**

一巻。現在確認できる伝本は二本のみ。多和文庫本の内題「細川両家記」より系統名を命名した。「細川両家記」と呼ばれる軍記物語には、群書類従二〇に収録され、『細川両家ニ成始由来聞見事記』『正禄間記』といった題を有する作品があるが、これとは異なる[9]。当系統はこれまで紹介されたことがなく、『戦国軍記事典』などにも記載がない。おそらく原初形態に近い本文と考えられるので、本稿で考察する。

【参考】E　『公方両将記』

上下巻。伝本としては黒川真道旧蔵本が存在していたが、その黒川本は散逸している。[10] 続々群書類従四に収録されており、また異本注記が付されていることから、最低二本の伝本が存在していたと推測できる。Aの巻一から巻三途中（三好之長の自害）と内容が重複し影響関係が想定されるが、独自記述も多い。

右の四系統を類別する最も明瞭な基準は、前述の通り巻数と巻の区切り方である。各書の記述する年代と巻数・別題を［表1］に一覧する。

［表1］

	（一四九三）明応の政変まで	（一五一八）大内義興の帰国まで	（一五三一）大物崩れまで	（一五六九）（略）本圀寺の変まで	（一五七三）畠山秋高殺害まで
A	巻一「畠山記」	巻二「舟岡記」	巻三「高国記」	巻四～巻七（別題省略）	巻八「野田福島合戦記」
B	巻一		巻二	巻三～巻八（別題省略）	
C	「畠山記」	「舟岡記」	「高国記」		
D	（別題なし）				
E	上巻	下巻			

各書ともに、応仁の乱の顛末を語るところから物語が始まる。そして、細川高国が滅ぶ「大物崩れ」を描くところでC・

Dは擱筆、A・Bも巻を改める。ここまで各書は、記述内容・構成においてほとんど一致を見せるほか、極めて近しいテキストを有している（ただし、後述するがDのテキストは他と少し距離がある）。高国の死後のことに記述が及ぶのがAとBであり、Bはいわゆる「本圀寺の変」（三好三人衆が足利義昭を襲撃した事件）ころまでを記述している。

本稿ではA～Dをそれぞれ、類書グループを形成する一系統として扱い、グループ全体を便宜的に《三部軍記》群と呼称・表記する。呼称について、A・BはC『三部軍記』系統の記述内容以降のことがらも記述しているが、本稿では両書を「細川高国の死以降の内容も含んでいる『三部軍記』の一類書」と見做すこととする。そのため、Aは巻三まで、Bは巻二までを特に取り上げることを断っておく。

さて、このように類書が並立するに至った経緯として、先に成立していたCに、その後の畿内動静を書き加える形でA、ついでBが誕生した、という流れが想定されている。[11] また、佐藤陸氏は『公方両将記』と『足利季世記』を比較、「『公方両将記』がオリジナルであり、その本文を改竄・削除したものが『足利季世記』である」とした。[12] したがって、現状《三部軍記》群の展開した順は（E→）C→A→Bであるとされている。

右のような経緯を踏まえ、E『公方両将記』は、《三部軍記》群と関連する作品の一つとして、本稿においても考察対象とする。ただし、『公方両将記』は《三部軍記》群と比べると、テキストや記述内容にある程度、差異があるため、類書としては認めない。

伝本に目を転ずると、まず、A以外にもC系統の伝存数が、端本も含めて比較的多いことがわかる。また《三部軍記》群の全伝本を合計すると実に三五本にのぼり、一五世紀末～一六世紀初頭の畿内を描いた軍記物語としては最も伝存数が多いものとなる。

同時に、《三部軍記》群は全国各地の諸機関に所蔵されており、大名家、武家、藩校の旧蔵になるものも多いことも判明する。武家にて修養書として書写され読まれたためではないか。また、《三部軍記》群に限ったことではないが、一般に戦

国軍記は、江戸時代には史書としての性格を強く帯びていたと考えられている。前述の通り『本朝通鑑』等、後続の史書がこれを典拠としていることを鑑みると、《三部軍記》群もまた、戦国期畿内の抗争およびこの時代の歴史観を形成した有力な史書であったと想定してよいだろう。

三　《三部軍記》群内諸系統の成立順序

前述の通り、『三部軍記』『足利季世記』『歴代記』の先後関係について研究したのは佐藤陸氏である。氏は「『公方両将記』が一連の類書のオリジナルである」という見解をもとに、『公方両将記』→『三部軍記』→『足利季世記』→『歴代記』という流れを想定した。では、『別本両家記』という系統の異なる伝本が見出された時、この書は他書といかなる関係にあるといえるか。改めて成立順を検討したい。まずは、各書のテキストを比較する。

三―一　文脈出現箇所の差異

【例1】細川政元を暗殺し、澄之を迎える香西元長・薬師寺長忠

［別本両家記］

両陣互ニ入乱レ火花ヲ散シテ戦ケルニ、澄元小勢ナレハ叶マシト見テ、三好・高畠、澄元ヲ御供申シ、江州へ落行ケル。香西・薬師寺、一戦ニ打勝テ喜悦ノ眉ヲ開キ、両人談合シテ丹波ヨリ九郎澄之ヲ迎ヘ取リ、京兆ノ家ヲ継セ管領ト仰キ、両人権ヲ執リ天下ヲ雅意ニ任セントス。澄之ハ九条殿ノ御子ナレハ、上一人ヲ初メ、公家・武家ノ用ヒケル

［三部軍記］

三好・高畠、澄元ヲ御供申シ、近江ヲサシテ落行ケル。防州ニ御在ス義材御所ハ大ニヨロコヒ、国々ノ味方ヲ集メ御出張ノ用意有リ。中国・西国、大方味方ニ参リシカトモ、毛利治部少輔ヲ初シテ（ママ）、宗徒ノ大名アマタ京都ノ御下知ニ順ヒケレハ、此人々ノモトエ京ヨリ御教書ヲ被下ケル。（略）

事カキリナシ。防州ニ御座ス義材、此由ヲ聞テ大ニ悦ヒ、国々ノ味方ヲ集メ御出張ノ用意アリ。中国・九州、大方味方ニ参ルトイヘ共、毛利治部少輔ヲ始メ、宗徒ノ大名京都ノ御下知ニ随フ。此人々ノ許へ京都ヨリ御書ヲ賜リケル。

（略）

澄之最期事付義材上洛還任事

三好筑前守之長ハ、六郎殿ヲ御供申シ、江州甲賀ノ谷ニ山中新左衛門ヲ憑ミテ在ケルカ、……

①A澄之最後

香西・薬師寺相談シテ、丹波ヨリ九郎澄之ヲ迎トリ、管領トアフキ右京大夫ニ移ス。是ハ九条殿ノ御子ナレハ、上一人ヨリ初メ、公家・武家ノモテナシ奉ルコトカキリナシ。香西又六・薬師寺三郎左衛門権ヲ取リ、②B天下ヲ皆雅意ヲ以テ振舞ケリ。カクテ五十余日ヲ過ケルニ、三好之長、六郎殿ヲ御供申シ、江州甲賀谷ニ山中新左衛門ヲ憑ミテ……

※異同

［足利季世記］①澄之最後之事　②天下ワカマヽニ

［歴代記］A（右①に同じ）　B（右②に同じ）

【例2】三好之長と澄元の死去、高国の栄華

［別本両家記］

六月十日、阿州ニテ（澄元は）遂ニ空ク成玉フ。真乗院ト申ケル。様々医術ヲ尽シケレ共、其験ナカリケルコソ悲シケレ。行年廿五歳トソ聞ヘシ。

将軍家与高国不和事

［三部軍記］

イロ〳〵養生アリケレトモ、定業ノ悲サハ終ニ平癒ナクシテ、同六月十日、阿州ニテ空ク成玉フ。号二真乗院一トシテ、行年廿五歳トソ聞ヘシ。三好討レ、澄元サヘカク成玉ヘハ、高国一統シテ、威勢万人ノ上ニ①盛リテ、門葉ニモ肩雙ブル人モナシ。

三好之長京都ニテ討レ、京兆澄元阿州ニテ逝去シケレハ、今ハ頭ヲ指出ス者ナシ。高国ノ威万人ノ上ニ立チ、肩ヲ双フル人ナシ。其比高国、和歌ノ道ニ心ヲ寄テ、六百番ノ歌合興行ス。伊勢国司北畠殿ハ高国ノ聟ナレハ、敷嶋ノ道ハ此人ト友ナシ玉フ。又弓馬ノ道ヲ興シ射礼ヲ始メ方式ヲ旧ニ復シ、子息六郎稙国ニ命シテ上ノ馬場ニテ犬追物ヲ執行ヒ、小笠原備前守・波々伯部源次郎・伴出羽守等役之。サレハ、諸人首ヲ傾ケ、国々ノ大将モ彼下風ニ立ン事ヲ思ヘリ。

②公方与高国不和

其比高国、和歌ノ道ニ心カケ、六百番ノ歌合興行ス。伊勢国司北畠左中将殿、高国ノ聟ナレハ、同此人③子息六郎稙国ニ命シテ上ノ馬場ニテ犬追物ヲソ④行ヒ、小笠原備前守・波々伯部源次郎・伴出羽守等役之ケリ。サレハ、諸人首ヲカタムケ響ヲナシ、国々ノ大将達モカノ家風ヲソノゾミケリ。

※異同

［足利季世記］①イキヲヒ門葉　②公方義植（ママ）ト高国不和之事
③ト相談アリ又武芸ヲ心ロカケ射礼ノ法ヲ中興シ
④トリ行ヒ　（③は脱文か）

［歴代記］該当する箇所が存在せず

傍線部が表すことは、両者とも同一である。【例1】は「細川政元を殺害したのち、細川京兆家内衆の香西元長と薬師寺長忠が相談し、丹波にいた九郎澄之を招き後継者に決定、澄之は九条家の子息であったから公家も武家もこれを重んじた」こと、【例2】は「三好之長が京都で討たれ、細川澄元も阿波で没した今、高国に肩を並べる者がいなくなった」ことを述べている。しかし、例えば【例1】の文脈は『別本両家記』では前段中に置かれるのに対し、他では全て章段を改めてのち、掲げられる。このように『別本両家記』のみが他書と異なる形態をとる箇所は複数見出され、『別本両家記』の特殊性

を伺うことができる。

三―二　序文

《三部軍記》群のうち、『別本両家記』を除く三書はいずれも、「聖徳太子ノコ、ヲ切レカシコヲ断、子孫有セシト宣ヒシモ思当ル事アリ。アマリ子孫多ク、兄弟権ヲ争ヒ、其家ヲ亡ス基ヒナリ……」と始まる序文を有している。系統によって多少の異同がみられるものの、いずれも、源頼朝の二子が争ったこと、室町幕府の分裂のこと、摂関家が分かれ「五摂家」の状態になったことなどを挙げ、「兄弟が多くいることは一家の滅亡に繋がる」との見解を述べるものである。

さて、《三部軍記》群成立の流れを考えるにあたり、この序文は示唆に富んでいる。

まず、『別本両家記』のみがこの序文を有しないことから、『別本両家記』の先出性を想定できる。

続いて、この序文の後半に「今澄元ト高国ト二方ニナリ、諸人双方ニ成、是ヲ立ントシテ、カヤウニ乱ノ基ト成ル」とある点が注目される。すなわち、この序文には細川政元の後継者の座をめぐり激しく争った細川澄元と高国を呼び出す狙いがある、と読み取れるのである。特に高国は《三部軍記》群では主人公格ともいえる重要な地位を与えられており、また「高国記」の最終段では高国の死およびその生前の事績が回顧され賞賛される。《三部軍記》群において追悼話群とも呼べる記述が用意されるのは高国のみである。したがって、高国の滅亡と対応するこの序文は『足利季世記』ではなく、三巻構成の『三部軍記』を念頭に置いて書かれたと考えるべきなのである。ここに『三部軍記』は『足利季世記』『歴代記』に先行するものと把握される。

また、序文の書き出しに注目すると、これが『徒然草』第六段を典拠としていることが判明する。

聖徳太子の御墓をかねてつかせ給ける時も。ここをきれかしこをたて。子孫あらせじと思ふ也と侍りけるとかや

（清濁・句点は烏丸本に拠る）

『徒然草』の流布と権威化には、早くとも慶長年間の古活字版の刊行を待つ必要がある。[13] したがって、この序文が新たに付された時期――『三部軍記』の形態が確立された時期は江戸時代以降であるとみるべきであろう。

三―三　故事の引用

【例3】明応の政変にて捕らえられた足利義稙を、「遁世者」が逃がす場面

［別本両家記］

公方家、頓テ彼尼御前ト一ツ乗物ニメサレ、篭ノ中ヲ忍出テ北国ヘ落サセ玉ヒ、畠山修理大夫・椎名・神保ヲ御頼ミ、越中国放生津ヘ下着アリ。彼遁世者ハ公方家ノ落サセ玉フヲ隠シ、日々御膳ヲ上ケ、公方家ノ御座アルコトクニモテナシ御物語ナントシテ十日計過ケルカ、後ニハ人々知テケル。紀伊守聞テ大ニ驚キ、此者知ヌ事アラシト遁世者ヲ捕ヘ様々拷問シケレ共落サレハ、後ニハ河原ヘ引出シ首ヲ刎ケル。

［三部軍記］

公方、ヤカテカノ伯母君ト一ツ乗物ニメシテ、籠ヲ御出アリテ北国ヘ落サセ玉フ。中ニモ、畠山修理大夫・椎名・神保ヲ頼ミテ、越中国放生津ヘ下着アル。遁世者御落アルヲ隠シ奉リ、日々御座ノ如ク御膳ヲ上ケテ、独リ御物語ナト申ケレトモ、十日計過ケレハ自然ト人ノ[A]知リテケル。**［昔シ、鎌倉ニテ頼朝卿ノ御代ニ、志水殿ト申ハ、木曾義仲ノ御子ナリ。人質ノ為ニ鎌倉ニ御座有ケル。木曾殿御打死ノ後、木曾殿ノ御子息ナレハ召コメ奉リケルヲ、女房ノ姿ニ成リ落チ玉ヒケルニ、御乳母子海野幸氏一人御座ノ座敷ニ残リ居テ、独リ物語ヲ申シ、独リ双六ヲ打ケリ。外所ノ人ハ志水殿ノ御座トノミ思ヒケル。程ヘテアラハ**

レ、幸氏メシトラレテケリ。加様ノ先例ヲ思ヒ、カノ遁世者モカク計ヒ申シケル。」B波々伯部紀伊守、此入道ヲ①虜サマ〳〵問ケレトモ落サリシヲ②C河原へ引出シテ首ヲキリテケリ。

※異同

［足利季世記］①トラヘ　②後ニハ

［歴代記］A 知リニケル　B（ナシ）　C（右②に同じ）

［　］内が故事引用部分である。ここでは、木曾義仲の嫡子で、頼朝に人質として送られていた「清水冠者」（木曾義高）が密かに鎌倉を脱出する間、腹心の海野幸氏が「独リ物語」をするなどして監視の目を欺いたことが回顧される。(14)

このように、広く知られる故事を引用し、物語の登場人物が置かれた状況、感情を効果的に描出する方法は《三部軍記》群においては比較的多く用いられる。しかし、その頻度は『別本両家記』とそれ以外とで差があり、現に、右に引用した箇所は『別本両家記』に存在しない。

三―四　逸話的側面への興味

【例4】細川政元の異常性について

［別本両家記］

京都ノ管領細川右京大夫政元ハ、魔法ヲ修シ、飯縄法、愛宕法ヲ行ヒ、四十

［三部軍記］

京管領細川右京大夫政元ハ、四十歳ノ比マテ女人禁制ニテ、魔法、飯綱ノ法

［歴代記］

京管領細川右京大夫政元ハ、四十歳計ニ至ルマテ女人禁制ニテ、飯綱ノ法、

ノ比マテ女妃ヲ禁シ、或ハ経ヲ読、陀羅尼ヲ誦シ、サナカラ僧体修験道ノ輩ニ同シ。……此比政元、魔法ヲ修スルコト盛ニシテ、後ニハ御心モ乱、ウツ、ナキ事ナト宣ヒケル。

①ヲ行ヒ、サナカラ出家ノ如ク又山伏ノ②如クニシテ、或時ハ経ヲヨミ、多羅尼ヲヘンシケレハ、見ル人身ノ毛モヨタチケル。……此③時ヨリ政元、魔法ヲ行ヒ玉ヒ、空ニ飛上リ空中ニ立ナトシテ不思議ヲ顕シ、後ニハ御心モ乱、ウツ、ナキ事ナト宣ヒケル。

愛宕ノ法ヲ行ヒ玉ヒケレハ、……此時分ヨリ政元、魔法行ヒ玉ヒ、空エ飛上リ空中ニ立ナトシテ、不思議ノ体ヲナシ、ウツ、ナキ事ナト宣ヘハ、……

※異同　［足利季世記］①アタコノ法　②如シ　③時分

細川政元が修験道に熱中していたことなどは他の軍記物語類にも広く見られる。ただし、「魔法」により政元が「空中ニ立」つ術を体得していた、という脚色を施すのは、管見の限り『三部軍記』が最初である。このエピソードは、後続の『足利季世記』『歴代記』、また『公方両将記』『重編応仁記』にも現れるが、『別本両家記』には見られない（『公方両将記』と《三部軍記》群との先後関係については後述）。

また、畠山政長の自害後、再起を図る畠山尚順（初名尚慶、政長嫡男）の家臣「木沢」のことを語る章が《三部軍記》群各書にみられる。この章段の名称も『別本両家記』とそれ以外で異なっている。『別本両家記』は章題名を「畠山尚慶帰河州事」と作るのに対し、『三部軍記』は「雪敲之事」、『足利季世記』『歴代記』は「雪タ、キノ事」とする。なお「雪たたき」との呼称はこの章の筋書きに由来する。(15)

章段名を「畠山尚慶帰河州事」とする『別本両家記』では、のちに細川高国らとともに足利義稙政権の安定に大きく貢献する畠山尚順が、父・政長の死後はじめて本拠である河内国に帰還した、という点が注目されている。一方、『三部軍記』

以下は、その筋書きの意外性、木沢の剛胆さなどに注目し、章段名に「雪たたき」を採用したものと考えられる。主眼をどこに置くか、という点で、『別本両家記』と比べ『三部軍記』以下はより逸話的要素への興味を高めているのである。

三―五　小括

以上のように、記述する時代・ことがらは一致していながらも、『別本両家記』とその他の軍記物語では、テキストや構造に微妙に差異が生じている（三―一）。また、単に差異が生じているに留まらず、『別本両家記』のみ、序文をもたない（三―二）、故事を引用しない（三―三）、脚色・逸話化が未進行（三―四）などの特徴がある。両者間で文章の順序が入れ替わったり、『三部軍記』以下で文章が増補されていたりするなどの現象が、本稿で挙げなかった他の箇所にも多く見られている。では、『別本両家記』の位置はどう考えるべきか。

序文より、『三部軍記』系統の成立が『足利季世記』『歴代記』に先行すると考えられることは既に述べた。すると、記述する年代を同じくするなど『三部軍記』との近接性が想定される『別本両家記』の位置は、

・『三部軍記』の典拠となった

・『三部軍記』系統から生まれた一系統であり、その後、他系統に影響を及ぼさなかった

のいずれかになる。妥当なのはどちらか。

まず、既に述べたとおり『三部軍記』は『徒然草』を引用する。『徒然草』は、室町時代も写本で流布していたものの、その文章がほかの作品に引用されるようになるには、慶長年間の古活字版刊行、すなわち、誰もが知る「古典」として認知されるのを待たねばならない。よって、該当する文脈を有しない『別本両家記』の成立年代は『三部軍記』のそれよりも遡ると推定される。序文をわざわざ削除する必要性も感じられない。

また、前に『三部軍記』系統は逸話的側面への興味を強めている、と指摘したが、実際は『別本両家記』にも逸話的要素

は多少、現れている。畠山政長自害の場面で、次のような記述が見える。

政長ハ藤四郎ノウチ刀ニテ腹ヲ切玉フニ、三度マテ引玉ヘトモ、曹テ切レサリシカハ投ヤリ玉フ。側ナル薬研ニ当リ、薬研ヲハ裏表二重ヲ徹シケル。扨コソ薬研藤四郎トソ申ケル。重代ノ刀ニテ主ソ惜ケルカト宣フ処ニ、……

政長の所持していた刀が「薬研藤四郎」と呼ばれるようになったきっかけを記している。また、故事の引用についても、『別本両家記』には、

（薬師寺与二（長忠）は）与一ヲ害ケリ。与二ニハ今度ノ忠賞トシテ桐ノ御紋ヲ賜リ、摂州ノ守護代ニ補セラル。源義朝カ父ヲ殺ケルニモ不劣ト爪弾ヲソシタリケル。

（細川政元生害事）

というような文脈や、

若槻伊豆守頼久、我身ハ老人也、余命幾程モアラシ、此城ヲ枕トシテ死ナント残留リ、源三位頼政カ老後ノ自害ヲ思出シ、扇ヲ打敷テ

花サカヌ今ノ浮身モ古モ身ノナル果ハカワラサリケリ

ト詠シテ腹十文字ニ切テ死ケリ。

（細川澄元摂州発向事付若槻伊豆守討死事）

のような実例が見られる。

仮に、『別本両家記』が後出であると考えると、『別本両家記』作者は『三部軍記』にみられていた序文、および逸話的表

現・故事引用の一部のみを削除するという方針を取った、ということにならざるを得ない。これはやや不自然である観がある。『別本両家記』先出と仮定した上で、『別本両家記』に既にみられた表現技法が『三部軍記』にて推し進められた、と考えるのが妥当ではなかろうか。

以上より、『別本両家記』は『三部軍記』系統に先行する書である、と結論づけられる。記述する時代・ことがらは一致していながらも、テキストや構造に差異が生じている、というその実態からすると、あるいは『別本両家記』を改稿する形で『三部軍記』が生まれたのかもしれない。

既述のとおり、《三部軍記》群は後世まで影響力を有し続けた。このことを鑑みると、《三部軍記》群の母体となった『別本両家記』の価値は看過すべからざるものがあるだろう。

なお、『別本両家記』成立時に何か典拠となる軍記物語が存在したのかどうか、という問題が依然として残るが、紙幅の都合上、別稿を用意したい。

四　《三部軍記》群と周辺軍記物語との関係

前章では、《三部軍記》群内にて『別本両家記』が占める位置について述べた。では、先行研究にて『三部軍記』や『足利季世記』の母体とされた『公方両将記』は、改めてどのように位置づけることができるか考えたい。

この問題を考えるため、《三部軍記》群と、『公方両将記』、および後続作品である『重編応仁記』内『応仁後記』（『重編応仁記』は、『応仁前記』『応仁広記』『応仁後記』『続応仁後記』の四つの部分から成る）に記されている内容を［表2］に一覧した。該当する記述がある場合は「○」で、かつその記述内容が概ね一致する場合は、一致するもの同士を「◎」もしくは「●」で、記述が無い場合は「―」で示した。

［表2］

	主なできごと	巻一「畠山記」該当部分	① 序文	② 応仁の乱の顚末	③ 足利義尚の学問好尚。義尚と義政、飛鳥井雅康との和歌贈答	④ 義尚の六角討伐	⑤ 義尚の死	⑥ 足利義稙の将軍就任。義政、義視の死	⑦ 伊勢宗瑞の戦功	⑧ 畠山政長の自害、尚順の脱出	⑨ 畠山家の由来	⑩ 足利義稙、能登国に落ち延びる。足利義澄の将軍就任
	公方両将記			○	●	●	●	●	○	◎		●
《三部軍記》群	別本両家記			◎		◎	◎	◎	◎	◎		◎
	三部軍記		◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎		◎
	足利季世記		◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎		◎
	歴代記		◎	◎		◎	◎	◎	◎	◎		◎
	応仁後記			○	●	●	●	●	○	○	○	●

⑪	畠山尚順の再起（「雪たたき」の逸話）	●	◎	◎	◎	◎	●
⑫	後土御門院崩御	●	｜	｜	｜	｜	●
⑬	細川政元の大和侵攻、「鳥屋」の討死	●	◎	◎	◎	｜	●
⑭	赤沢朝経（細川政元被官）の近江侵攻	○	｜	｜	｜	｜	○
	巻二「舟岡記」該当部分						
⑮	細川家の由来	○	｜	｜	｜	｜	○
⑯	細川政元の奇行。澄之・澄元養子入りの経緯	○	◎	◎	◎	◎	○
⑰	薬師寺元一（政元被官）の謀反	○	◎	◎	◎	◎	○
⑱	両畠山和睦。赤沢の大和侵攻	○	｜	｜	｜	｜	○
⑲	政元、暗殺される。赤沢の敗死と澄之の家督相続	◎	◎	◎	◎	◎	◎
⑳	澄之の自害	○	◎	◎	◎	◎	○
㉑	澄元の放逐、細川高国の家督相続。三好長秀の自害	○	◎	◎	◎	◎	○
㉒	池田筑後守（澄元方）の活躍	○	◎	◎	◎	◎	｜
㉓	義稙の将軍再任。義稙邸への盗賊乱入事件	◎	◎	◎	◎	◎	○
㉔	諸国争乱のこと。長尾為景の事績	◎	◎	◎	◎	◎	｜
㉕	永正七年の大地震	◎	◎	◎	◎	◎	◎

㉖	六角・京極両家の争い	｜	◎	◎	◎	◎	◎	○	●	｜	◎	◎	◎	◎	◎
㉗	足利義晴・義維の誕生	｜	◎	◎	○	◎	◎	｜	◎	｜	◎	◎	◎	◎	◎
㉘	蘆屋川原の戦い	｜	◎	◎	◎	◎	◎	｜	◎	｜	◎	◎	◎	◎	◎
㉙	六角定頼の還俗と足利義稙への出仕	｜	◎	◎	◎	◎	◎	｜	◎	｜	◎	◎	◎	◎	◎
㉚	舟岡山の戦い。戦功により大内義興が管領に就任	｜	◎	◎	◎	◎	◎	｜	◎	｜	◎	◎	◎	◎	○
㉛	六角定頼、有力国人の九里氏を滅ぼす	｜	◎	◎	◎	◎	◎	○	●	○	◎	◎	◎	◎	◎
㉜	今川氏親と斯波義達の闘争	○	◎	◎	◎	◎	◎	｜	◎	｜	◎	◎	◎	◎	◎
㉝	朝倉教景の躍進のこと。大内義興帰国	●	◎	◎	◎	◎	◎	｜	◎	｜	◎	◎	◎	◎	◎
㉞	大内家の由来	｜	◎	◎	◎	◎	◎	｜	◎	｜	◎	◎	◎	◎	◎
㉟	池田三郎五郎（澄元方）の反抗	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	●	○	◎	◎	◎	◎	◎
	巻三「高国記」該当部分														
㊱	越水城の戦い	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
㊲	若槻伊豆守および伊丹・野間の自害（いずれも高国方）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
㊳	等持院の戦い。三好之長の自害	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
㊴	六角高頼、細川澄元の死	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○
㊵	高国の管領就任、高国の事績	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	●	◎	◎	◎	◎	◎	◎

㊶	高国と義稙の関係悪化、義稙が京を追われる		◎	◎	◎	◎	○				
㊷	義稙の死、高国の家督譲渡、稙国（高国嫡男）の死		◎	◎	◎	◎	◎				
㊸	細川尹賢、香西元盛を謀殺		◎	◎	◎	◎	○				
㊹	波多野元清・柳本賢治、高国に反旗を翻す		◎	◎	◎	◎	○				
㊺	畠山尚順、高屋城を攻めた柳本を撃退		◎	◎	◎	◎					
㊻	朝倉勢の奮戦		◎	◎	◎	◎	◎				
㊼	高国と足利義晴、近江へ落ちる		◎	◎	◎	◎	◎				
㊽	浦上村宗、高国に助力する。中嶋の戦い		◎	◎	◎	◎	◎				
㊾	大物崩れ		◎	◎	◎	◎	◎				
㊿	高国、捕縛され自害		◎	◎	◎	◎	◎				
51	高国の生前の功績を称える		◎	◎	◎	◎					

右より、『公方両将記』は《三部軍記》群に比べて多くの独自記事を有していること、これらが再び現れる作品としては『重編応仁記』内『応仁後記』が挙がることがわかる。[16]

ところで、『公方両将記』の独自記事には、足利義尚と義政らの和歌贈答（③）、『樵談治要』が書かれたこと（③）、飛鳥井雅康（正しくは雅親）の義尚追悼の歌（⑤）、三浦道寸や斯波義達の動向に関する記事（㉜）、細川家を初めとする各家の略歴（⑮）など、広範な文献博捜が必要となるものが多い。『公方両将記』の成立もまた、一六世紀中ではなく版本が普及

する江戸期に求められよう。

一方、『公方両将記』と形態が類似する『重編応仁記』では、テキストが近しいのみならず、共通の誤謬（飛鳥井雅親を一貫して弟・雅康と取り違えるなど）が現れていることが注目される。『公方両将記』と最も近しい作品は、《三部軍記》群ではなく『重編応仁記』なのではないか。『公方両将記』の成立時期は「永禄年間よりも後」（戦国軍記事典）、「（稿者注：永禄年間より）成立時期を今少し早く考えてもよい」[17]というよりむしろ、一七世紀後半まで引き下げられるべきかと考える。

さらに、『公方両将記』の記述を精査すると、「「雪たたき」という章題名」「細川政元の空中浮遊への言及」「木曾冠者と海野幸氏の逸話」などが見出せる。すなわち、既に述べた「『別本両家記』には見えず、『三部軍記』以降に見られるようになる要素」が『公方両将記』にも現れているのである。

以上より、《三部軍記》群の母体は『公方両将記』であるとはいえない。『公方両将記』が後出である。

では『公方両将記』とはいかなる軍記物語なのか。稿者はこれを、武家もしくはその関係者によって作成された、史実に取材し軍記物語の体裁を取っている一種の教育書であると考える。

『公方両将記』には、《三部軍記》群には見られない次の五つの基本的性格・思想が看取される。

ア　「忠」を重んじ、忠義を守る武将を賞賛する一方、忠義心を忘れ驕り高ぶった人物には必ず敗北、死が待っている、という基本原理

イ　為政者の資質として「文学愛好」「礼法・武芸の熟達」「理非分明たる政治姿勢」の三要素を挙げる

ウ　上位者（将軍、主君、親）の尊重

エ　歴史叙述の充実

オ　意味の通じづらい文章、誤文の修正

実例は煩瑣になるため挙げないが、右の五つの要素は全編を通じて貫かれている。『公方両将記』の作者は、これらの要素をテキストに織り込む必要があった――すなわち、忠義心、為政者としての資質、あるいは歴史上のできごとを「読者」に享受させたいと考えていた。同時に、作者は多くの関連資料を閲覧することができ、文筆に通じてもいる人物である。それは、軍記物語を通して子弟への歴史・道徳教育の効果を狙った、武家もしくはその関係者である、と想定できようか。

五　おわりに　――《三部軍記》群をどう評価するか――

以上、本稿では《三部軍記》群という視点を導入し、類書群を構成する諸作品を比較整理し、その展開についての考察を試みた。その結果、これまで『細川両家記』と混同されていた一部伝本を『別本細川両家記』として区別すべきこと、そして『別本両家記』を《三部軍記》群の原初に比定すべきことを明らかにできた。また、『公方両将記』と『足利季世記』の関係は再考すべきことが判明し、これに従って「先行作品の改竄品」とされてきた『足利季世記』への評価も、改めるべきものとなった。

《三部軍記》群は、細川家以外の諸勢力――畿内情勢に大きな影響力を有した六角、朝倉、大内、そして足利将軍家――の動向も交え、一六世紀畿内を描出した最初の戦国軍記であった、といえる。例えば、《三部軍記》群同様、明応年間以降の畿内を描く軍記物語として知られる『細川両家記』は、細川家を中心とした歴史叙述を意識的に行う傾向にある。したがって、場合によっては将軍の死すらも触れられない。『細川両家記』と《三部軍記》群の記述方針および視座には、大いに懸隔があるといっていい。

そして、前述の通り《三部軍記》群のテキストは日本全国に散らばり、主に大名やその家臣たち、藩校など武家の蔵書となった。そこでは、《三部軍記》群が、彼らのアイデンティティを形成したり、歴史を学んだりする材料となりえたであろう。さらに、《三部軍記》群は史書として影響力を有し、『重編応仁記』という版本を産み出す基ともなった。『別本両家記』

に起こり、《三部軍記》群という形態へと多様に発展する中で完成された一六世紀前半の畿内史は、こうして継承され、より広範に広まってゆくのである。

附記

本論中の主要な文献の底本は以下の通りである。『別本細川両家記』…聖藩文庫本（34）。『三部軍記』…書陵部本（22）。『足利季世記』…改定史籍集覧一三（臨川書店、一九八四年）。『歴代記』…京大本（19）。括弧内の番号は注の伝本一覧に準拠。また、引用にあたって私に句読点を附し、通行の字体に改めた。なお、聖藩文庫本『別本両家記』の翻刻を後日報告予定である。資料の閲覧調査のご許可を賜りました所蔵先の諸機関に篤く御礼申し上げます。

註

(1) ただし、彰考館本、島原松平文庫本等に「一部の巻が明暦の大火（一六五七）にて焼失した」との旨の識語があるため、成立下限は一六五〇年頃に求められる。

(2) 佐藤陸氏「『応仁記』以後――もう一つの年代軍記――」「『公方両将記』の周辺」「『三闘記』と『季世記』の先後」『義経記と後記軍記』双文社、一九九九年

(3) 前述の通り、《三部軍記》群の伝本に関し、『国書総目録』の記述には混乱が見られる。例えば、「足利季世記」項に見られている「京都大学図書館本（四冊本）」は、今回の調査に当たってB『歴代記』系統に属することが判明した。また、C『三部軍記』系統は統一書名を与えられておらず「畠山記」「舟岡記」「高国記」の各項目に分断されているほか、「舟岡記」項には『三部軍記』系統とはまた異なる作品である『舟岡山軍記』と呼ばれるものも含まれている。

(4) 以下、各系統に属する伝本を一覧する（記載事項は順に、所蔵機関名／函架番号／巻・冊数／書写年代／備考）。実見に及んで

いない伝本に関しても、判明する範囲で函架番号を記し、利便を図ることとする。

『足利季世記』系統伝本（計一五点）

1 秋田県立図書館／二一―ゴウド・三一〇／八巻七冊／〔江戸中期〕／秋田史館旧蔵
2 山形大学付属図書館／A―七一二、A―一五一七
3 鶴岡市立図書館／雑―一／一巻一冊／〔江戸後期〕／巻八のみ。致道館旧蔵。国立国会図書館蔵本と揃いを成す。
4 国立国会図書館／一三一―一四／七巻六冊／〔江戸後期〕／闕巻八。致道館旧蔵。鶴岡市立図書館蔵本と揃いを成す。
5 国立公文書館（内閣文庫）／一六七―八八／八巻七冊／〔江戸後期〕／堀直格旧蔵
6 静嘉堂文庫／七二―四〇／八巻六冊／〔江戸後期〕
7 彰考館［巻八のみ］
8 蓬左文庫［巻六のみ］／八―一一八／一巻一冊／〔江戸中期〕
9 京都大学附属図書館／五―〇九・ア・一／八巻三冊／〔江戸中期〕／外題「足利歴代記」。和学講談所旧蔵
10 京都大学附属図書館（谷村文庫）／五―〇九・ア・一
11 住吉大社御文庫／一八一―六
12 天理大学附属天理図書館／二一〇・五―イ二五／八巻七冊／〔江戸前期〕／榊原忠次旧蔵
13 洲本市立洲本図書館［巻三のみ］／三―二／一巻一冊／〔江戸中期〕／柴野栗山、徳島藩蜂須賀家旧蔵
14 今治市河野美術館／四四七―一八五二
15 肥前島原松平文庫／二〇三―二二／八巻七冊／〔江戸前期〕／松平忠房旧蔵

(5)

『歴代記』系統伝本（計四点）

16 国立国会図書館／一三一―一〇〇／八巻四冊／〔江戸中期〕／巻一～四と巻五～八は別筆で、寸法もやや異なる。取り合わせ本か。
17 静嘉堂文庫／七二―四〇／八巻四冊／〔江戸後期〕／外題『足利季世記』
18 群馬大学図書館（新田文庫）／N二一〇・四六―A九二／九巻二冊／天明六年／新田岩松家旧蔵。学問所蔵『足利季世記』との校合を書入。

(6)

19 京都大学附属図書館／五―〇九・ア・二／八巻四冊／〔江戸中期〕／外題『足利歴代記』。和学講談所旧蔵

『三部軍記』系統伝本（計一四点）

20 東北大学附属図書館（狩野文庫）／四九三三―一／「高國記」のみ

21 国立公文書館（内閣文庫）／一六七―一二五／三巻二冊／〔江戸前期〕／外題・内題「畠山記」。昌平坂学問所旧蔵

22 宮内庁書陵部／二〇七―四一〇

23 東京大学総合図書館／G二四―九〇一

24 慶應義塾図書館／二一二―一八四―一、二一二―一八五―一／二巻二冊／〔江戸後期〕／外題「畠山記」「高國記」、闕「舟岡記」

25 静嘉堂文庫／七二―三六／三巻一冊／〔江戸後期〕／外題「畠山記／舟岡記／高國記」

26 尊経閣文庫／二―二〇五

27 尊経閣文庫／三―三―四三

28 彰考館／丑二三―〇一六五六

29 富山県立図書館／二一〇・四六―四

30 金沢市立玉川図書館近世史料館／特一六・八二―一四五、一五〇、一四六／三巻三冊／〔江戸中期〕／外題「畠山記」「舟岡記」「高国記」

31 金沢市立玉川図書館近世史料館／特一六・八二―一四九／三巻二冊／元禄一五年／外題「三闘記上畠山舟岡」「三闘記下高国」。今枝直方写

32 加賀市立中央図書館聖藩文庫／二一二―七四―一／三巻一冊／〔江戸中期〕／外題「畠山舩岡記」

33 大阪府立図書館／三二四・四―二四―#

宮内庁書陵部蔵本等。

(7)

『別本両家記』系統伝本（計二点）

34 加賀市立中央図書館聖藩文庫／二一二―七五―二／一冊／〔江戸前期〕／外題「細川両家之記」、内題なし

35 多和文庫／四・七

(8)

『国書総目録』においては、当系統本の実態が認知されていなかったためか、『細川両家記』（「細川両家ニ成始由来聞見事記」等

(9)

の題を有する方）の伝本として「多和文庫本（一冊本）」すなわち『別本両家記』が誤って挙げられている。

(10) 続々群書類従編纂の際、黒川本を写したものが現存する（「足利季世記」『戦国軍記事典　群雄割拠篇』（項目執筆：佐藤氏））。

(11) 『戦国軍記事典　群雄割拠篇』、および佐藤氏「『公方両将記』の周辺」（前掲２）

(12) 佐藤氏「応仁記以後――もう一つの年代軍記――」（前掲２）

(13) 『徒然草』の普及過程については、古くは松永貞徳が「天正の比までは名をしる人もまれなりしか慶長の時分より世にもてあつかふ事となれり」（『なくさみ草』）と指摘した。ほか、横田冬彦氏は「江戸時代、近世社会の成立とともに驚異的な普及をみせはじめた」といい、古活字版以降の印刷技術の発達と注釈書の刊行から、江戸時代における『徒然草』受容の実態を明らかにする（「『徒然草』は江戸文学か？――書物史における読者の立場――」『歴史評論』六〇五　二〇〇〇年九月）。また、川平敏文氏は慶長年間の『徒然草』研究の勃興を精査した（『徒然草の十七世記――近世文芸思潮の形成』岩波書店、二〇一五年）。

(14) 当該箇所は『吾妻鏡』元暦元年四月二一日条を典拠として書かれたと考えられる。

自去夜。殿中聊物忿。是志水冠者雖為武衛御聟。亡父已蒙勒勘。被戮之間。爲其子其意趣尤依難度。可被誅之由内々思食立。被仰含此趣於昵近壮士等。女房等伺聞此事。密女告申姫公御方。仍志水冠者廻計略。今曉遁去給。此間。假女房之姿。姫君御方女房圍之出内畢。……而海野小太郎幸氏者。与志水同年也。日夜在座右。片時無立去。仍今相替之。入彼帳臺。臥宿衣之下。出髻。日闌之後。出于志水之常居所。不改日來形勢。獨打雙六。……至于殿中男女。只成于今令坐給思之處。及晩綷粹露顯。

（引用は新訂増補国史大系に拠る）

(15) 『吾妻鏡』は慶長年間に古活字版が制作されている。すなわち、右の箇所からは、海野幸氏の事績を増補する『三部軍記』が成立したのはこの古活字版が上梓されて以降ではないかと推定できる。海野幸氏の事績は『平家物語』等、他の軍記物語には管見の限り見出せない。一方、『将軍記』（寛文四年［一六六四］刊）『北条九代記』（延宝三年［一六七五］刊）といった近世刊行軍書に海野幸氏の逸話が語られていることが注目される。

筋書きは以下の通り。木沢が履き物に付いた雪を堺の商人「ナヤ（菜屋・名屋）」の門にて叩いて落としていたところ、ナヤの妻の密通相手と間違えられ屋敷に招き入れられた。木沢はナヤの知人を装い、妻の密通をナヤに明かすとして妻とその父である豪商「ベニヤ（紅屋・臙脂屋）」を脅し、ベニヤの助力（兵粮の提供）を獲得し尚順の再起を助けた、というものである。

(16) 両者は、足利義尚の事績から細川高国が政権の安定を達成するまでを描く、というように記述範囲に一致を見せることが既に指摘されている（松林靖明氏「『重編応仁記』考――〝事実〟への執着」甲南国文三七、一九九〇年三月）。

(17) 笹川祥生氏「「戦国軍記」の範囲――細川政元殺害の記録を例に――」『軍記物語講座第四巻　乱世を語りつぐ』（松尾葦江氏・編）花鳥社、二〇二〇年

（補注）本稿校正中、新たな伝本を二点、見出し得たため、ここに附記する。

・『足利季世記』系統

長野県立歴史館／〇―六・あ・二―一、二、三／八巻三冊／〔江戸後期〕／外題『足利歴代記』。小諸藩牧野家旧蔵

・分類不可

慶應義塾図書館／二一五―一一三七―一、二／十巻二冊／〔江戸中期〕／外題『歴代記』。『足利季世記』巻一～三および六～八と、『歴代記』巻三～六の取り合わせ本。